

人間精神の内に存在するものの存在様態 ルトと唯名論

デカ

著者	大野 岳史
著者別名	Takeshi OHNO
雑誌名	国際哲学研究
巻	10
ページ	85-91
発行年	2021-03
URL	http://doi.org/10.34428/00012738

人間精神の内に存在するものの存在様態

——デカルトと唯名論——

大野 岳史

キーワード：観念、知性作用、概念上の存在者、実象的存在者、唯名論

序

デカルト¹哲学において「観念」(idea)が主要な用語の一つであると同時に、当時の神学者・哲学者との議論を生んだことは、『省察』『反論と答弁』を読めば明らかだろう。デカルト哲学研究においても、「観念」についてのものは積み重ねられ、哲学史におけるデカルトの「観念」を位置づける試みも少なくない。これらの研究は、「対象の実象性」(realitas obiectiva)や「対象的存在」(esse objectivum)などの用語とともに検討される。観念の在り方がこれらによって表現されるためである。デカルトは観念が形成されるためには原因が必要であると考えのだが、カテルス(『省察』に対する第一反論者)はこの見解を否定する。観念に対するデカルトとカテルスとの対立は、スコトゥス主義とトマス主義との対立として理解されることが多かったが、カテルスをオッカム²的であると解釈することもできる。本論ではカテルスの主張をオッカム哲学をとおして理解することの妥当性を検討し、デカルトにおける観念の対象的存在をオッカムの唯名論との対立を介して吟味する。

1 デカルトとカテルスにおける対象的存在

はじめに観念の対象的存在についての、カテルスとデカルトによる反論と答弁を概観しよう。デカルトは「第三省察」において観念の原因を探求し、神の必然的実在を、無限実体である神の観念が私自身に由来しないということから結論する。これに対してカテルスは、デカルトにおける観念が「知性のうちに対象的に存在するかぎりでの、思惟された事物」(res cogitata, quatenus objective est in intellectu)であると指摘した上で、「観念はいかなる原因を要するのか」と問いかける(cf. AT.VII, 92)。カテルスによれば、「知性のうちに対象的に在る」ことは「知性の働きを対象という仕方限定すること」、「外的命名」(denominatio extrinseca)であって、「事物に属する何ものでもない」。またデカルトは「第三省察」で観念が「この、あるいはあの対象の実象性を含む」(AT.VII, 41)ために何らかの原因を要すると主張しているが、この点に関しても、カテルスは「対象の実象性は純粋な命名であって、現実には何ものでもない」(AT.VII, 92)と反駁する。

対して、デカルトは「第一答弁」で、カテルスが「知性の外に存在する対象としての事物そのものに注視する」(AT.VII, 102)ことによって、「第三省察」における「知性の内に対象的に存在する」ものが「観念」(idea)であることを見失っている、と指摘する。カテルスは「知性のうちに対象的に存在する」ものすべてが外的命名であるかのように論述することで、観念が外的命名であると語っていることになる。ところがデカルトによれば、「知性の内に対象的に存在する」という表現は「外的命名」と「観念」にそれぞれに固有の仕方適合する。デカルトは「外的命名」が「知性の働きを対象という仕方限定すること」であると認めながらも、それが「知性の内に対象的に存在する」のは、知性の外に在る事物そのものの観点からのみである。対して、「観念」は知性の働きの限定とは異なり知性の対象が通常在るその仕方知性のうちに在る。例えば、「太陽の観念は、なるほど、太陽が空において在るように形相的にではなく、対象的に、すなわち対

象が通常知性のうちに在る仕方で、知性のうちに実在する太陽そのものである」(AT. VII, 102-103)。デカルトによれば、太陽の観念の存在様態は実際の太陽のものと比べるとはなはだ不完全だが、太陽の観念も「まったくの無ではない」(AT. VII, 103)。この意味で、観念は思惟された事物である。対象的存在は単なる概念上の存在者ではなく、実象的な或るものとして、原因を要するのである。

またこの問題について、デカルトがカテルスの言明を正確に捉えていないと思われる箇所がある。デカルトが観念について「まったくの無ではない」と語っているのに対して、カテルスは「無が虚構された何か、一般に言う概念上の存在者のことを言うのでしたら、それは無ではなく、判明に概念される実象的な或るものです」(*nihil fictum quid dicit, quod vulgo ens rationis indigetant, non est nihil, sed reale aliquid auod distincte concipitur*)と主張している(cf. AT. VII, 94)。つまり、カテルスにおいて概念上の存在者であればそれは何らかの実象的存在者であるため、概念上の存在者である観念も実象的存在者でなければならない。これに対して、デカルトは先の言明を「同じものを虚構された何か、つまり概念上の存在者ではなく、判明に概念される実象的な或るもの、とも彼は言いますが」(*ait etiam eandem non esse fictum quid, sive ens rationis, sed reale aliquid, quod distincte concipitur*)と言い換えている(cf. AT. VII, 103)。デカルトによればこの主張によって、カテルスはデカルトの見解を容認していることになる。ところがこの換言は明らかに誤っている。カテルスにおいて観念は概念上の存在者でありかつ実象的存在者でもあるのだが、その上で観念が何ら原因を要しない。これに対して、デカルトは観念を概念上の存在者ではなく実象的存在者であり、判明に概念されるためには原因が必要であると主張している。観念が実象的存在者であるという共通の見解から、両者はまったく逆の帰結を提示しているのである。

2 デカルトとカテルスの対立図式とスコラ学

デカルトとカテルスの対立は、いくつかの仕方でスコラ学に見出される対立と比較される。主だったものは以下のとおりである。

まずジルソンは『方法叙説註解』の中で観念について詳述し、「対象の実象性」のスコラ学的起源としてオッカムやガブリエル・ビールにおける「対象的存在」(*esse objectivum*)とスアレスにおける「対象的概念」(*conceptus objectivus*)を挙げ、その上で対象的存在がスコラ学とデカルトの間で異なることを見出した³。スコラ学における対象的存在は、実象的存在者ではなく、概念上の存在者に過ぎず、原因を必要としない。これに対して、「デカルト哲学において、対象的存在は事物の現実的存在よりは少ない存在ではあるが、しかしながら実象的存在者であり、それゆえ自らが実在する原因を要する」⁴。したがってジルソンの解釈によれば、対象的存在に関してデカルト哲学とスコラ学の相違は、前者において対象的存在は実象的存在者であり、後者において対象的存在は概念上の存在者に過ぎない、ということにある。

「対象的存在」に関してデカルトとスコラ学との関連を解明する試みはダルビエによってさらに進められる⁵。ダルビエによれば、デカルトにおける対象的存在はスコトゥス的なものであり、そのためカテルスとデカルトの対立はトマス主義⁶とスコトゥス主義の対立と同じものである⁷。こうした対立図式の変更はあるが、ジルソンと同様に、ダルビエもデカルトとカテルスにおける対象的存在の差異を「概念上の存在者」によって説明する。すなわち、対象的存在はトマス主義(カテルス)においては概念上の存在者に過ぎず、スコトゥス主義(デカルト)においてはそれ以上の何かである、という点で異なる。以上のようにカテルスをトマス主義とする解釈がいくつかある中で⁸、ルノーはカテルスの見解がオッカム的であると主張する。ルノーによれば、カテルスはオッカムにおける「神のイデア」についての論述から着想を得て、デカルトの見解をオッカムの敵対者であるスコトゥスの見解と同一視している⁹。つまり、カテルスとデカルトの対立はオッカムとスコトゥスの対立でもある¹⁰。

ルノーはオッカムによる「イデアは被造物そのものである」¹¹というテーゼに着目する。このテーゼが意味することは、「イデアは単的に神的知性が認識する事物そのものであって、事物とは区別される可知的存

在などではない」¹²ということである。ところでオッカムによれば「イデア」という名称は併意語（nomen connotativum）、すなわち「或るものを第一義的に、また別の或るものを第二義的に表示するもの」¹³である。したがって、イデアは事物そのもの（すなわち被造物そのもの）を表示するだけでなく、事物が神的知性によって認識されていることをも表示している。言い換えれば、イデアは事物であるだけでなく、神がそれについてもつ認識（作用）でもある。オッカムにとって「知性の内に対象的に存在する」という表現は、神の知性によって認識されることを意味する¹⁴。

以上より、オッカムにおけるイデアは本論の主題である「人間精神の内に存在するもの」ではないことは明らかである。実際、オッカムによれば、「〈(被造物が) 認識された対象のように神の内に含まれる〉ことが〈認識される〉ということである、と理解すべきである」¹⁵。そしてイデアは被造物であり神の知性作用でもある。こうしてイデア・被造物・知性作用の間に媒介は要求されなくなり、神の知性による認識は対象に依存しないこととなる¹⁶。本論においてより重要なことは、イデア・被造物・知性作用の間に媒介や関係が成立しないため、認識とその対象の関係性が消失するということにある。すなわち認識作用とその対象の間に因果関係はなく、神によって認識されることでその対象が実象的な何かを受け取ることはないのである。また、オッカムにとって人間精神の内に対象的に存在するものは外的命名に他ならず、被造物は神によって知性認識されることで外的命名によって名づけられる¹⁷。ルノーによれば、以上のようなオッカムにおけるイデアについての理解は、対象的存在が外的命名であって事物のうちの何ものでもないというカテルスの見解と合致しているのである。

しかしながら、オッカムにおける対象的存在は神の知性認識と関連づけられるのであって、イデアは人間精神の内に存在するものではない。デカルトやカテルスが論じている観念は人間精神の内に存在するものであって、神の知性の内に存在するものではない。たしかにオッカムにおいて「イデア／観念」は知性作用ないし外的命名として理解され、人間精神の内に存在するものが知性作用であるとすれば、人間精神の内に存在するものも外的命名にすぎないかもしれない。しかしながら、人間精神のうちに存在するものが外的命名であるからといって、それが概念上の存在者にすぎないとただちに帰結するわけではないだろう。次にルノーの解釈やカテルスの見解から一旦離れて、オッカムにおける人間精神の内に存在するものに関する記述を確認しよう。

3 オッカム『大論理学』における精神の内と精神の外との区別

デカルトが自己の内と自己の外とを明確に区別したように、渋谷によれば「オッカムが、〈心の内の言葉と、心の外のをを区別する〉という哲学的意図をもって『大論理学』を書いたことは明白である」¹⁸。オッカムにおいて人間精神の内に存在するものは精神の内の言葉（verbum mentale）¹⁹である。また精神の内の言葉とは、概念ないしその記号であり、話したり書いたりする言葉と類似している²⁰。精神の内に存在するものとしての言葉ないし語（terminus）は、話したり書いたりする言葉ではなく、それと類似しているものにすぎないことに注意しなければならない。オッカムは『大論理学』第一部第一章において、ボエティウス『命題論註解』第一巻に基づき、命題（propositio）と語にはそれぞれ三通りあると指摘している²¹。すなわち書かれた命題、話された命題、そして知性の内でのみ存在を有する概念された命題があり、同様に書かれた語、話された語、そして知性の内に概念された語がある。人間精神の内に存在するのは、知性の内に概念されたものであることは明らかだろう。そして人間精神の内に存在する言葉や命題について、オッカムはアウグスティヌスの権威に基づき「いかなる国の言語にも属さない」と考え²²、精神の内にとどまり続け外には発せられえないと帰結する。話され書かれた語が一般的な意味での語であるならば、人間精神の内に存在する語や命題は特異なものであるように思われる。というのも、どの国の言葉にも属さないのであれば、別の言語へと言語化されないかぎり、精神の外へと発信されえないからである。このようにして、オッカムは精神の内に概念された語を、話された語や書かれた語、すなわち精神の外に発せられた語とは異質なものと

して捉えている²³。

さらに概念（精神の内に存在するもの）と事物（精神の外に存在するもの）があたかも切り離されているようであることを強調するのであれば、概念が事物を表示しそれを代示している（supponere）ことに注目すればよい。オッカムは語の表示が代示であると考え、それまでの概念に関する理解を離れ、形象（species）を不要なものとして排除する。つまり、外的事物の感覚的認識をとおして形象を受け取り、そうして対象の本質把握へと進むという認知システムが、オッカムにおいては成立しない。概念は記号だが、事物の本性を表示する必要はなく、何らかの意味で事物と類似している必要もないのである²⁴。精神の内に存在するもの（概念）は精神の外に存在するもの（事物）を表示するが、両者の関係性は記号とその対象の関係に過ぎず、それ以外の関係は排除されるに至ったのである。

4 オッカムにおける概念

オッカムにおいて精神の内と精神の外は明確に区別されていることが明らかとなった。それでは、精神の内に存在する概念はどのような存在者として理解されていたのだろうか。オッカムにおいて、概念は一貫して精神の内の言葉あるいは事物の記号であるが、その存在様態に関するオッカムの見解は変遷している。すなわち、前期には心象（fictum）として、後期には知性作用（intellectio）として理解されている²⁵。カテルスは観念を知性作用として理解しているため、オッカムの後期の概念論がカテルスに影響しているように思われる。ところが、カテルスにおいて観念は概念上の存在者であるが、オッカムにおける概念は概念上の存在者であるとともに、実象的な存在者として定立しうる。すなわち、『大論理学』第一巻第四十章では、「概念が精神の性質である」という主張に基づき、次のように示される。

精神の内にある命題や推論や語は概念上の存在者であり、しかも事物の世界において真に実象的に存在するものであり、いかなる物体的性質よりも完全で、より実象的な存在者である。…（中略）…もし「実象的な存在者」という語を事物の世界において存在する真なる性質であるものを代示すると解するならば、「概念上の存在者は実象的な存在者である」という命題は真である。²⁶

概念が精神の性質であるなら、それは精神を基体とするものであり、その存在も基体に依拠する。そのため、概念の実象的に存在することも、基体としての精神そのものに依拠する。また、物体の性質が実象的に存在すると言えるのであれば、同様に精神の性質である概念上の存在者も実象的存在者であろう。さらに『命題論註解』第一巻序章では、「概念は精神の性質である」という見解と「概念は知性作用である」という見解とが一致すること、そしてすべての概念上の存在者が実象的に存在することが示される²⁷。

しかしながら、実象的存在者と概念上の存在者の区別がまったく論じられないわけではなく、同じく『命題論註解』第一巻序章では、「心の内の存在者」（ens in anima）と「心の外の存在者」（ens extra animam）が区分される。すなわち存在者が心の内の存在者と心の外の存在者に区分されるのだが、これは事物とそれを表示する記号との区分と同様である。ただしこの区分は実体を物体的なものと非物体的なものに区分するのとは異なる。物体と非物体の場合には、一方が他方によって述語付けられない、すなわち「物体は非物体である」とは言えない。これに対して、心の内の存在者と心の外の存在者は記号とその対象の関係にあり、そのため一方が他方によって述語づけられうる、すなわち「心の内の存在者は心の外の存在者である」と言うこともできるのである²⁸。概念上の存在者と実象的存在者の関係も同じであるならば、この関係は知性作用とその対象との関係にほかならず、そのかぎり「概念上の存在者は実象的存在者である」と言うことができる。このようにして、概念上の存在者が精神の性質として真に存在する場合、あるいは知性作用とその対象の関係にある場合、概念上の存在者と実象的存在者の区別が排されうるのである。

結論

オッカムにおける概念論を踏まえ、カテルスとデカルトの対立図式を再度検討することで、本稿の結論としよう。カテルスにおける精神の内に存在するものに関する理解は、詳細まで検討することはできないが、オッカム的であると言えよう。たしかに、カテルスが精神の内に存在するものを言葉や記号として理解しているという確証は得られず、またルノーの解釈において、神の有するアイデアがカテルスにおける対象的存在と類似することが指摘されたが、オッカムにおける人間精神の内に存在するものについては言及されないままであった。しかしながら、人間精神の内に存在するものの存在様態に関して、オッカムとカテルスは、実象的存在者と概念上の存在者が二者択一であることを排する、あるいは概念上の存在者が実象的存在者として定立しうることを示したという重要な共通点を有する。ただし、概念上の存在者が精神の性質であること、そして実象的存在者と概念上の存在者が記号とその対象の関係にあることを、カテルスは明示していない。それでもカテルスの主張は、実象的存在者と概念上の存在者を明確に区別するデカルトの主張との間には大きな隔たりがある。しかしながらデカルトはこの相違を見逃し、カテルスにとって概念上の存在者は判明に概念される実象的存在者ではない、と考えた。

デカルトがオッカムおよびカテルスと共有している主張は、精神の内に存在するものは実象的な何かである、というものである。精神の内に存在するものであっても、彼らはそれを実象的存在者として認める。実象的存在者かあるいは概念上の存在者かという二者択一はオッカムやカテルスには見出されない。ただし「概念上の存在者は実象的存在者である」と言うとき、オッカムとカテルスが同じことを考えているのかは不明瞭である。オッカムにおいては、精神の性質としての実象的存在者であることが表示されているのか、あるいは記号とその対象との関係が表示されているのか、どちらかである。対して、カテルスにおける実在的な或るものとしての概念上の存在者は、概念されたものにすぎず、現実には何ものでもない。

オッカムとカテルスにおける概念上の存在者がそれぞれ一致しないように、デカルトとカテルスが精神の内に存在するものを実象的存在者として認めるとしても、実象的存在者についての理解がデカルトとカテルスで異なるように思われる。この差異の源泉として、以下のような可能性を提示しておこう。カテルスが提示する精神の内に存在するものは知性作用のみであるが、デカルトは観念と概念上の存在者である知性作用を別のものと考えているのではないだろうか。デカルトにおける観念は実質的な内容を持ち、それは形相的に存在する対象と同じあり方をしている。こうした観念の表示内容と表示対象との関係は、オッカムが想定している記号としての概念とその表示対象との関係とは明らかに異なり、またカテルスにおける知性作用にも見出されない。そのため、デカルトにとって観念に見出される対象の実象性が無であることはありえないが、カテルスにとって観念は概念されたものにすぎないのである。

以上のようにデカルトとカテルス（およびオッカム）の対立図式が認められるとしても、精神の内に存在するものが実象的存在者であるという点で対立はない。観念について問うべきは、概念上の存在者なのか、実象的存在者なのか、ではない。本稿において見出された相違点は、精神の内に存在するものが実象的であることの根拠である。オッカムにおいては概念が基体とする精神や、概念の表示対象に依拠する。対してデカルトにおいて、太陽の観念が知性における太陽であるように、観念が実象的であることは観念のあり方そのものに依拠し、観念はそれ自体で実象的存在者であろう。さらに考究するのであれば、デカルト精神の内に存在するものの存在様態のみでなく、観念の作用とその効果を精査することで、デカルトと唯名論の認識論を比較検討することへと進まなければならないだろう。

註

- ¹ デカルトからの引用はアダン・タヌリ版（Descartes, Œuvres de Descartes, publiées par Charles Adam & Paul Tannery, Nouvelle présentation par P. Costabel et B. Rochot, Vrin 1964-1974.）に基づき、AT と略記し、ローマ数

字で巻数を、アラビア数字で頁数を表示する。

- ² オッカムからの引用は、Guillelmus de Ockham, *Opera Philosophica et Theologica*, St. Bonaventure University, 1967-1985 に基づき、OPh と略記し、ローマ数字で巻数を、アラビア数字で頁数を表示する。
- ³ Cf. E. Gilson, *René Descartes : Discours de la méthode*, Texte et commentaires par E. Gilson, Vrin, 1967(1925), p.321
- ⁴ E. Gilson, op. cit., p.321
- ⁵ Cf. R. Dalbiez, « Les scolastique de la théorie cartésienne de l'être objectif », *Revue d'histoire de la philosophie*, t.3, 1929, pp.464-472
- ⁶ ここでダルビエはカイエタヌス『トマス・アクィナス『神学大全』註解』を介しているため、「トマス・アクィナスとスコトゥスの対立」というより、「トマス主義とスコトゥス主義の対立」としたほうが正確であろう。
- ⁷ この解釈はジルソンにも受け入れられることとなる。(cf. E. Gilson, *Études sur le rôle de la pensée Médiévale dans la formation du système cartésien*, Vrin, 1967(1930), pp. 202-207)
- ⁸ ジルソンとダルビエの他、アルモガットもカテルスの主要な議論がトマスからの借用であると解釈している (cf. J. -R. Armogathe, "Caterus' objections to God", *Descartes and his contemporaries, Meditations, Objections, and Replies*, The University Press of Chicago, 1995, p. 42)。
- ⁹ Cf. L. Renault, « La réalité objective dans les Premières objections aux Méditations métaphysique: Ockham contre Descartes », *Revue de Métaphysique et de Morale*, no.1, PUF, 2000, p. 38
- ¹⁰ この見解については、リベラも概ね受け入れているように思われるが、ルノーとは異なる観点から考察している。すなわち、ルノーが対象的実象性に着目しているのに対して、リベラは「外的命名」に焦点を当てる。(cf. Alain de Libera, *Archéologie du sujet: La quête de l'identité*, Vrin, 2008, pp. 310-323)
- ¹¹ Ockham, *Scriptum in librum primum Sententiarum*, OTh, IV, 489
- ¹² Renault, op.cit., p.34
- ¹³ Ockham, *Summa Logicae*, OPh, I, 36
- ¹⁴ Renault, op.cit., p.35
- ¹⁵ Ockham, *Scriptum in librum primum Sententiarum*, OTh IV, 534
- ¹⁶ Cf. L. Renault, op.cit. , p.35; 村上勝三『観念と存在 デカルト研究I』知泉書館、2004 年、141-142 頁
- ¹⁷ Cf. Ockham, *Scriptum in librum primum Sententiarum*, OTh IV, 646
- ¹⁸ 渋谷克美『オッカム哲学の基底』知泉書館、2006 年、5-6 頁
- ¹⁹ オッカムは « mentale » を « in mente » とたびたび言いかえているため、どちらも「精神の内」と訳すことができる。また « conceptus animae » と « conceptus mentis » は言い換えられるため、ここで « anima » と « mens » を区別する必要はないだろう。
- ²⁰ 精神の内なる言葉、話している言葉、書かれている言葉についての理解は、アリストテレス『命題論』の次の箇所由来する。「声に出して話される言葉は、魂において受動的に起こっているものの符号であり、書かれている言葉は、声に出して話される言葉の符号である」(『アリストテレス全集 1』岩波書店、2013 年 112 頁)
- ²¹ Cf. Ockham, *Summa Logicae*, OPh, I, 9
- ²² アウグスティヌス『三位一体論』第一五巻第 10 章参照
- ²³ 以上のようにオッカムにおいて精神の内と精神の外が明確に区別されるが、精神の内に存在する概念と精神の外で発せられた語（記号）とが全く無関係であるわけではない。というのも、オッカムにおいて同一

の事物を精神の内に存在する語と精神の外に存在する語が別々に表示しうるからである。というのも、オッカムにおいて書かれた言葉・話された言葉・概念がそれぞれ事物（対象）を表示しており、その表示が同一の対象であることもありうるからである。そのため、概念と話された言葉が同一の事物を表示するという事態が、話された言葉と書かれた言葉に関する決まり事に応じて起きうる（渋谷克美『オッカム『大論理学』註解 I』創文社、1999 年、150-151 頁参照）。対して、トマスにおいて、書かれた言葉は話された言葉を表示し、話された言葉は概念を表示し、概念は事物（対象）を表示する。そのため、オッカムのようにそれぞれの言葉が同一の対象を表示することはない。

²⁴ 渋谷克美『オッカム哲学の基底』知泉書館、2006 年、10 頁参照。

²⁵ オッカムの概念論の変遷については、渋谷克美『オッカム「大論理学」の研究』創文社、1997 年 3-47 頁で詳述されている。

²⁶ Ockham, *Summa Logicae*, OPh, I, 113

²⁷ Cf. Ockham, *Expositio in librum Perihermenias Aristotelis Expositio in librum Perihermenias Aristotelis*, Oph, II, 358.

²⁸ Cf. *Expositio in librum Perihermenias Aristotelis Expositio in librum Perihermenias Aristotelis*, OPh II, 368-369.